

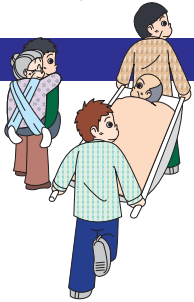
災害時要配慮者等へも心くばり



災害時要配慮者（一人暮らしや寝たきりなどの高齢者、身体的、知的な障害を有する人など）に対する援助も必要です。災害が発生した場合、情報把握、避難、生活の確保などの活動を、的確かつ迅速に行いにくい立場に置かれてしまいます。私たち一人ひとりがお互いに協力しあい、地域が一丸となって積極的な支援を行えるよう心がけましょう。

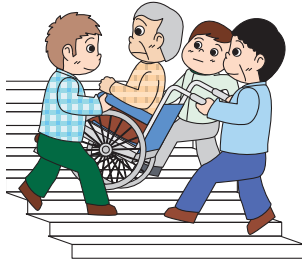
高齢者・傷病者

- 援助が必要なときは、複数の人で対応する。
- 急を要するときは、ひもなどで背負い安全な場所まで避難する。

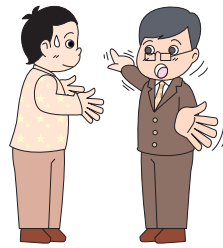


肢体の不自由な人

- 車いすは、階段では必ず2人以上、できれば3~4人で援助する。
- 上がるときは前向きに、下がるときは後ろ向きにして恐怖感を与えないように。
- とっさの脱出、避難の際に要支援者1人に対して、支援者が2人以上いるとは限らない。ひもなどで背負い、支援者の両手は自由がきくようにする。



耳が不自由な人



- 話をするときはまっすぐ顔を向け、口はなるべく大きく動かして話す。
- 筆談（筆記法）は手のひらに指先で文字を書くやり方でもよい。

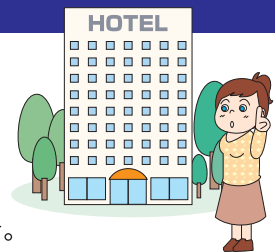
目の不自由な人

- 杖や杖を持った手をひっぱったり、後ろから押ししたりしない。
- 半歩前に立ち、ひじの上を軽く持ってもらい、ゆっくり歩く。
- 方向や目の前の障害物の位置などは、時計の文字盤の位置を想定して伝える。



外国人・旅行者

- とっさのときは、身振り手振りや、やさしい日本語で話しかけ、孤立させないようにする。
- 旅先では非常口の確認を。



※「やさしい日本語」とは：普段使われている言葉を外国人にもわかるように配慮した、簡単な日本語のこと。

帰宅困難者を支援します

外出先で大規模地震が起きたら？

まずは、身の安全が確保できる場所へ避難します。帰宅経路の安全が確認できるまでは、「むやみに移動（帰宅）を開始しない」ことが大切です。

平素からの備え

安否確認手段について取り決めておくことや、帰宅経路の確認、非常食や歩きやすい靴など、徒歩帰宅の際に必要な物資を準備しましょう。

徒歩帰宅支援ステーション

徒歩で帰宅するときは、県と協定を結んだコンビニエンスストア、ガソリンスタンド、郵便局等の店舗で、「水道水」「トイレ」「店舗が知りえた災害情報」の提供支援が受けられます。店舗入り口の「徒歩帰宅支援ステーション」ステッカーが目印です。



徒歩帰宅支援ステーションステッカー

防災ボランティア

阪神・淡路大震災のように大きな災害がおきれば、ボランティアが活躍します。自主防災組織等は自らの町を守るため活動し、ボランティアは被災者支援のために全国から駆付けてきます。そのボランティアが十分に力を発揮するためには、ボランティアの熱意と被災者からの二

ーズを調整するボランティア・コーディネーターおよびボランティア同士の協力・連携が必要不可欠です。迷惑ボランティアにならないように、災害ボランティアセンターの情報を収集し、安全に注意して活動しましょう。

